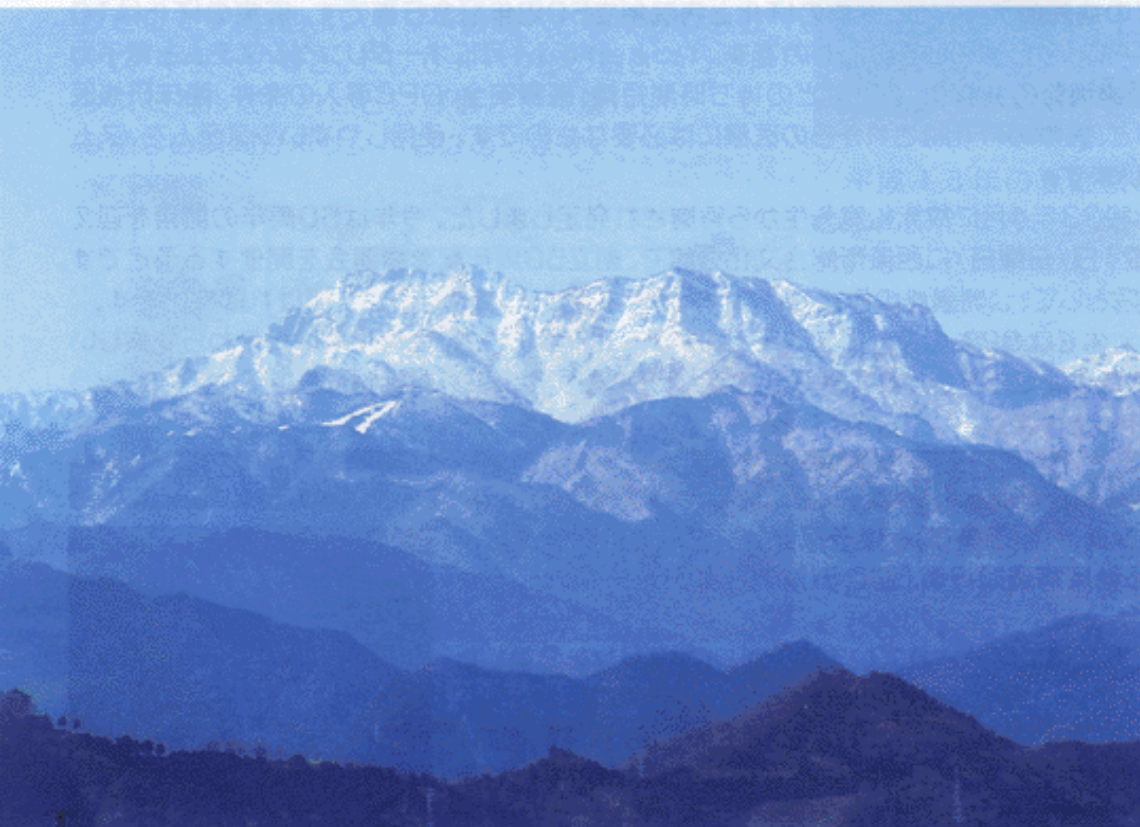


# ふれあい さいせい



発行  
済生会西条病院  
2008年新年号 第38号  
西条市湖日市269-1  
TEL(0897)55-5100



病院屋上から冬の石鎚山を望む 撮影：医療情報管理室 神原 勝己

創立50周年にあたって  
名誉院長 常光 謙輔

2008年 新年を迎えて  
院長 岡田 眞一

糖尿病週間行事が  
開催されました

病気のおはなし  
「糖尿病で」失敗しないために  
内科部長 南 尚佳

いしづち苑 文化祭  
介護福祉士 小松 良太

いしづち苑の年末

院内ボサノバ・ライブが  
開催されました!

全職員対象  
接遇研修会について

病棟での注射の混注について

ニューフェイス

## ❁ 創立50周年にあたって -病院存亡の危機- 名誉院長 常光 謙輔



名誉院長  
常光 謙輔

新年明けましておめでとうございます。年末・年始も休みなく働いてくださった皆さんは大変ご苦労さまでした。

今年は当院が昭和33年に赤松寛先生から病院の寄贈を受け済生会病院となってちょうど50年目になります。この半世紀の間に当初30床の外科単科病院から現在の150床、11診療科の地域中核病院に発展してきたことは大変喜ばしいことと思います。この秋の9月21日(日)に50周年記念行事として市民公開講座とコンサートを予定しております。

昨年は病院の南側にPET-CT・放射線治療装置棟が完成し、回復期リハビリ病棟もできて、さあこれからがんばるぞと思った矢先に医師不足のあおりを受けて脳神経外科など一部の診療機能が低下してしまい大変不本意なことになりました。この医師不足は当院だけの問題ではなく、全国的な現象ですが、さらに今年の4月からは循環器の常勤医師がいなくなることになりました。正に非常事態であり、病院存亡の危機ですが、全員で危機意識を持ち力を合わせてこの試練を乗り越えたいと思いますので何とぞよろしくお願い申し上げます。



# 2008年 新年を迎えて

院長 岡田 眞一



院長  
岡田 眞一

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、年金問題や食品の偽装報道が社会を賑わし、また政治や経済の不安定な状態が続きました。新しい年を迎え、心機一転よい一年となることを願います。

当院においても、昨年は眼科と脳外科の常勤医がいなくなり、どうなることかと危惧しておりましたところ、眼科は愛媛大学の協力で、9月から2人医師体制で再開することができました。脳外科は相変わらず常勤医を確保できず、診療に支障を来とし、ご迷惑をお掛けしております。昨年4月に導入した放射線治療機器とPET-CTは順調に利用されており、多くの患者さんの癌の診療に役立っています。地域医療にもっと利用されるようアピールしていきたいと思えます。

今年の病院のテーマは、医療のIT化と病院創立50周年記念行事です。医療のIT化は10年くらい前より目標にしていたものです。やっと、昨年11月にオーダリングシステムと電子カルテの導入を決定しました。医療情報の共有化、会計などの待ち時間短縮、医療安全、DPC導入の条件、臨床研修医受け入れの医療体制の整備など、医療のIT化はこれからの医療には必要なものです。使用しやすいシステムを、スムーズに導入していきたいと思えます。

また、済生会西条病院は、昭和33年4月に故赤松寛先生から寄贈され発足しました。今年は50周年の節目を迎えます。その歴史を祝して、9月21日(日曜日)に西条市総合文化会館で、創立50周年記念講演会を開催する予定です。市民のみならず開かれた病院として、公開講座の形式で行なう構想です。ぜひ、参加していただければ幸いです。

この4月の診療報酬改定も全体で0.82%のマイナス改定と決まっておりますので、医療環境は相変わらず厳しいものになると予想されます。職員全員で力を合わせて頑張り、この状況を乗り切っていきたいと思えます。今年もどうか宜しくご支援の程をお願い申し上げます。

## 糖尿病週間行事が開催されました

糖尿病対策チーム 神原 勝己

去る11月中旬、中央保健センター(旧西条市)と東予保健センターで市民健康講座の一環として、当院主催による糖尿病週間行事「防ごう!解消しよう!メタボリックシンドローム」が開催されました。

糖尿病週間は今まで11月の第二週に開催されていましたが、インスリンを発見したフレデリック・バンティングの誕生日・11月14日が国連決議により「世界糖尿病デー」に指定されたことから、平成19年は第三週の11月12日から18日までが「糖尿病週間」に設定されました。期間中は世界中でさまざまなイベントが開催され、国内でも東京タワーやいよつ高島屋の屋上観覧車がブルーにライトアップされました。

中央保健センター・東予保健センターでは、当院の内科・南 尚佳医師による講演会やスタッフによる血糖測定、栄養部による食品カロリーの展示が行われました。また期間中、院内・外来ロビーでも血糖測定や職員手作りの糖尿病災害手帳等の配布が行われ、多くの参加者で賑わいました。

これらの行事には当院の内科医師をはじめ、看護師・薬剤師・検査技師・栄養士・事務職員で結成された「糖尿病対策チーム」が中心となり、それぞれの分野での知識と力をあわせ活動しています。国内の糖尿病の患者数は推計約246万人(厚生労働省「患者調査の概況」平成17年)、厚生労働省「糖尿病実態調査」(平成14年)では「糖尿病が強く疑われる人」は約740万人、「糖尿病の可能性を否定できない人」は約880万人。計約1,620万人(成人の6人に1人)もの人々が糖尿病かその予備軍とみられています。失明や腎症・動脈硬化などを招き、体だけではなくその人生にまで深刻なダメージを与える糖尿病。これらの行事でその怖さと予防の大切さが多くの人に伝わればと思えます。





## 病気のおはなし「糖尿病で」失敗しないために 内科部長 南 尚佳

### 《軽い時からの生活改善が重要》

糖尿病患者における虚血性心疾患合併は、50年前の日本では少なく欧米と異なっていました。近年、虚血性心疾患関連の死亡は増加の一途をたどり、日本でも糖尿病患者の動脈硬化性疾患の発症は健常者の2-3倍であり、欧米と同様に糖尿病は動脈硬化症の主要な危険因子になりました。これらは最近50年間の生活習慣の激変によってもたらされました。車の普及から慢性的な運動不足に陥り、高カロリー食に溢れた食環境によって、“小太り”は当たり前となり、腹部の肥満に加え、生活習慣病の一つや二つがあっても驚くこともない状況になっています。糖代謝異常は軽微であっても、軽度の高血圧、脂質代謝異常が加わると、糖尿病特有の合併症（神経障害・網膜症・腎症）の発症以前に冠動脈疾患などの動脈硬化症が進行することになります。“糖尿病の疑い”や“境界型”の時点からの対策が不可欠です。

### 《インスリンは量と効きが大切》

糖尿病はやせ型と肥満を伴う糖尿病と大きく二つに分けられます。やせ型は膵臓から分泌されるインスリンの量の不足から糖尿病を発症します。肥満型ではインスリンは分泌量は過剰ですが、インスリンの効果が生体内で充分発揮できないインスリン抵抗性が耐糖能異常を悪化させます。インスリン分泌、インスリン抵抗性共に、遺伝素因と環境要因が関与しています。このインスリン抵抗性が動脈硬化を進展させます。西条市のような車の便利な地方都市では、運動不足により一層インスリン抵抗性が強まると考えられます。

### 《糖尿病と言われたら》

- ①血糖値、HbA1cと他の動脈硬化のリスクファクターをチェック。（血圧、LDL-コレステロール、HDL-コレステロール、中性脂肪、尿酸など）
- ②糖尿病特有の合併症（神経障害、網膜症、腎症）と動脈硬化症（心・脳・下肢血管）のチェック。
- ③間食は慎み、食事は腹7分目から8分目に控える。
- ④日常生活でできるだけ体を使い、1日1万歩を目指して歩く。
- ⑤禁煙。

毎日③④の実践により、糖尿病を始めとする生活習慣病は激減すると思われませんが、そこが難しいところです。仲間と共に健康的な生活習慣を実践しましょう。

## .....食生活のポイント..... インスリン療法について.....

### 《糖尿病を防ぎましょう》

食生活のポイントは**量**と**バランス**です。

☆適正なエネルギー量を知り（主治医や管理栄養士に相談）食べ過ぎない！

※食べた物を書き出してみるとよいでしょう。

☆常に野菜を食べることを心がける！

☆できるだけ時間を決めて（規則正しく）ゆっくりとよくかんで食べる！

糖尿病と診断されたら栄養相談を受けることをおすすめします。



管理栄養士 越智 泉

インスリン療法は不足しているインスリンを注射で補い、血糖コントロールを改善する大切な治療法です。インスリン療法では、個々のインスリン分泌パターンに合わせたインスリン製剤を使用し、低血糖や食後高血糖をさけながら、出来るだけ健康な人のインスリンの動きに近づけます。

インスリン製剤は、超速効型、速効型、中間型、混合型、持続型、超持続型に分けられます。インスリンの種類によって、インスリンの効き始める時間が異なるため、超速効型のインスリンを含む製剤では食事の直前に、速効型のインスリンを含む製剤では食事の30分前に、中間型のインスリン製剤では食事の30分前かあるいは寝る前に注射を打ちます。また、持続型のインスリン製剤は、インスリンの体内での動きが緩やかで効果が長時間持続するので、注射を打つタイミングはいつでもかまいません。

インスリンに関してわからないことがあればすぐに担当の医師または薬剤師にご相談ください。

薬局・薬剤師 神野 真奈



## いしづち苑 文化祭 2008年 介護福祉士 小松 良太

今回初めて、文化祭のリーダーを同僚の藤岡さんと共に務めることになりました。

今回の文化祭に協力して下さった入所者とそのご家族、ボランティアで参加して下さった方々、職員の皆さんにこの場をお借りして、心から感謝致します。

今年の文化祭は、例年と違う所が二つありました。一つは、バザー商品の「おでん」「ばら寿司」作りを外部委託したこと。私も実際にいただきましたが、なかなかの味!男性職員は口を揃えて、「ビールが欲しい」と呪文のように繰り返していました。入所者さんやご家族にも評判が良く、職員の呪文が運動したのか、「お酒!」と言われる入所者も本当にいらっしゃいました。

もう一つは、我がいしづち苑の誇る「焼きそば!!」今年は場所を中庭に移動しました。香ばしい焼きそばの匂いが中庭から1階中に広がり、空腹を堪えきれず、用もないのに中庭をうろうろしてみたり、不穏な行動をする職員(小松)もいたとかいなかったとか…。

「のみの市」では、開始直後よりお客さんがごった返す状態で、熱気、いや殺気にも似た空気がありました(笑)。これがまた大好評の内に幕を降ろしました。

一方ボランティアの方々による演芸も大変な盛り上がりで、午前の部の「フラダンス」では女性の華麗な踊りにうっとりし、口があぐりの状態で観賞する入所者さんも。午後の部では昔懐かしい童謡があり、途中で歌に合わせて踊りだす入所者さんもおられ、笑いに包まれました。飛び入り参加で苑長も歌謡曲を熱唱され、ふだん、苑長の診察姿にしか接していない入所者さんは、驚きと喜びの入り混じった表情で一緒に口ずさんでおられました。

また、入所者さん、デイケアの利用者さんが作成した入魂の作品の数々に、作成された当人も、自分の作品や他の作品に目を凝らしていました。

来年も利用者さん、職員が一丸となり、笑いに包まれたあたたかい行事にしたいと思っております。



## いしづち苑の年末

## 「餅つき」

よいしょ!よいしょ!の掛け声がペタン、ペタンの力強い杵音と交互に苑中に響き渡ります。

ゆく年に思い出をいっぱい包んで、くる年に期待と希望をもって…



## 「なでしこ劇団」

わっはっは、きゃーきゃーと笑いがたえることがありません。

この先、有名になり、引っ張りだこになるのも時間の問題!

今のうちにあなたの施設にもお呼びくださいな。





## 院内ボサノバ・ライブが開催されました!

年の瀬も押し迫った12月22日の午後。ブラジル・リオデジャネイロ在住のmacoさん(ボーカル)、ギター奏者・山田 裕さん、映画音楽の監督としても活躍中の沢田稔治さん(ベース)の三人を迎え、南棟外来ロビーの一角でボサノバ・ライブが開催されました。

「ボサノバ」とはポルトガル語で「新しい感覚」という意味で、ブラジルで発祥した新しい音楽のジャンルのひとつです。心地よいギターの調べと暖かみのあるベース・ギターの響き。そしてボーカルの透き通った声。リズムカルだけれどどこが懐かしく優しい… そんな癒しの瞬間がボサノバにはあります。



平成18年の夏に引き続き2回目となった今回のライブですが、施設係を中心に職員の皆さんの協力により立派な会場が用意され、入院患者さんを含め多くの観客が訪れました。演奏の合間には、macoさんと観客のみなさんとの楽しい語らいもあり、素晴らしい演奏とトークで会場は大いに盛り上がりました。

当院では音楽ライブの他にも、地元画家の絵画展や多くの絵画・写真を展示し「心の癒し」に取り組んでいます。病院を訪れた際にはぜひ、これらの作品やイベントで心癒されるひとときをお過ごしください。

### 全職員対象 接遇研修会について

接遇改善委員会 矢野 泰利

接遇改善委員会では、年に一度、全職員を対象にした接遇研修会を行っています。

今回の研修会は、接遇委員会の平成19年度の年間目標、「気持ちの良い挨拶をしよう」に沿って、挨拶や言葉遣いに関する研修会を企画しました。

挨拶については、職員同士あるいは患者さんとの間で相手に気持ちが伝わるような挨拶が出来ているとは言えません。こちらが、挨拶をしたつもりでも、声が小さかったり、相手の顔を見ていなかったりして、相手に伝わっていない場合もあります。

また、言葉遣いについても、敬語の使い方やクッション言葉の利用等、日常茶飯事に使用している言葉であっても、まだまだ改めなければならない言葉遣いが多くあります。

本来、この時期(12月~1月)は、日常勤務におけるクレーム等に対するロールプレイを行なってきましたが、今回の研修会は原点に戻り挨拶や言葉遣いに関する研修会を行いました。

研修会の当日は、常光センター長、岡田院長をはじめ、職員約80名余りが参加し、非常に充実した研修会となりました。

職員の皆さん、大きな声で相手に伝わるような気持ちの良い挨拶を。



平成19年12月27日 接遇研修会の様子



## 病棟での注射の混注について

薬局・薬剤師 神野 真奈

### 365日注射剤の混合調製を始めました。

昨年12月より、今まで病棟で看護師が行っていたラベルの作成・注射剤の混合調製の業務を薬剤師が実施しています。

注射剤は直接体内に投与され速やかに薬効を示すため、無菌性の確保や薬剤の適正使用に関して厳重に管理されなければなりません。しかし、県内でも薬剤師による注射剤の混合調製を実施している病院は少ないようです。

注射剤の無菌性確保に関しては、空気清浄度の高いクリーンベンチ内で混合調製を行うことにより、微生物の汚染や異物混入の防止が十分にでき、無菌的な注射剤の混合調製を実施することが可能となりました。注射剤の混合調製を無菌的に行うことで低栄養・免疫能低下患者への注射剤投与

に関して、カテーテルによる感染の発生原因のひとつを取り除くことができます。



注射剤の適正使用に関しては、注射剤処方箋の内容監査や投与速度・投与間隔・投与ルートなどの使用方法、調製においては多剤混合調製による配合変化や溶解後の安定性、複雑な溶解方法、適切な保存方法など、注射剤が患者に投与されるまで薬剤師がその専門的な知識や技術を活かして、安全に管理していく必要があります。

注射剤の混合調製を薬剤師が行うことで、今まで看護師が行っていた注射剤関連の業務が軽減され、看護師はケア業務に専念できるようになり、そして、注射剤の混合調製後、病棟で看護師と薬剤師による注射剤・ラベル・処方箋に関するダブルチェックを行うことで今まで以上に安全に注射剤を提供することができ、医療の質の向上につながると期待しています。

